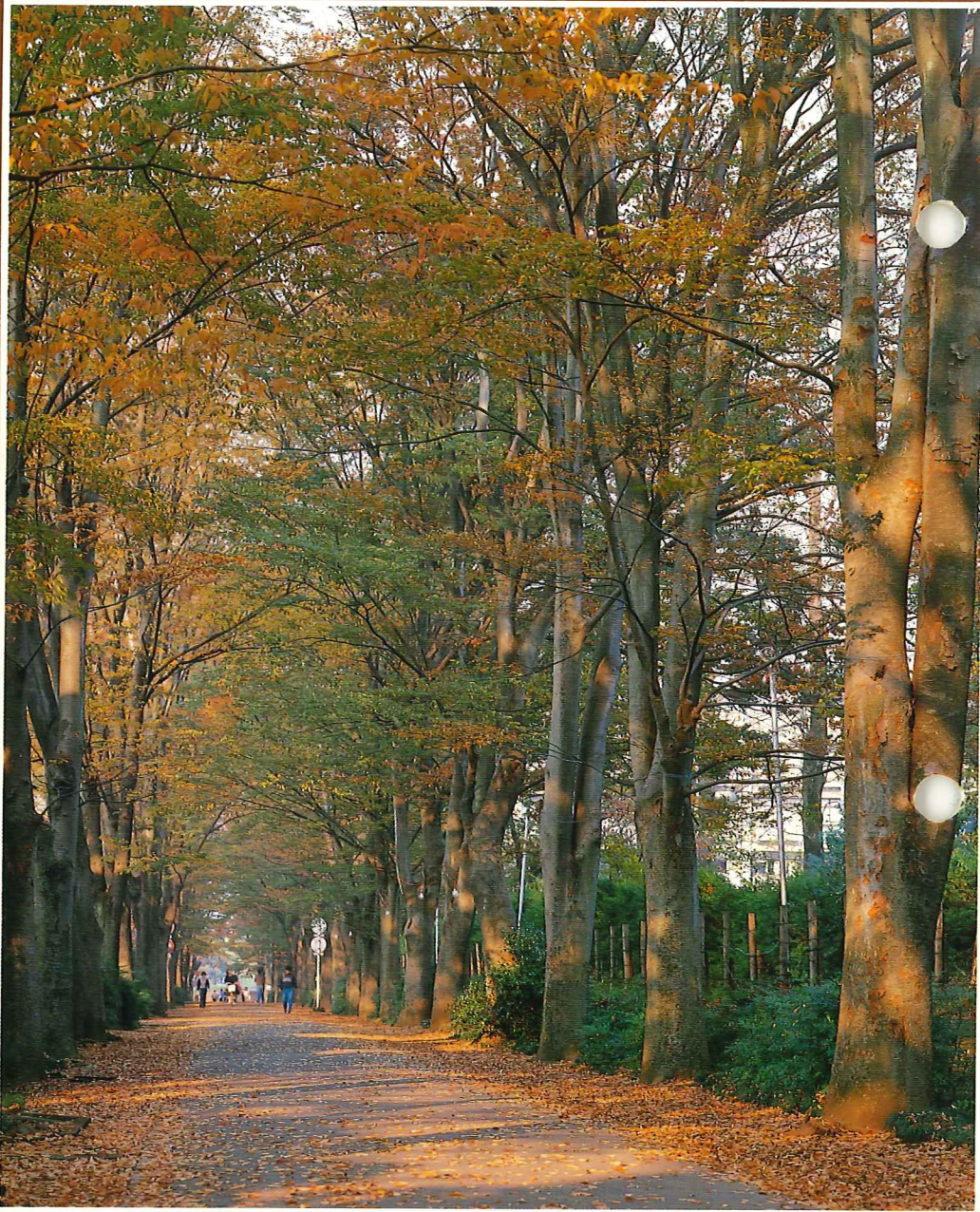


成蹊会誌 58

1983年12月



成蹊学園近況

◇施設建設募金事業のご報告に際して

成蹊学園は、個性尊重の人格教育という建学の理想をめざすとともに近年の多様化・国際化する社会に対応して活躍できる実力を備えた人物を養成するために幅広く、かつ少人数による行きとどいた教育を心がけております。

このような教育を行うにあたっては、教育に直接携わる学園教職員の熱意とたゆまざる努力が最も必要でありますが同時にその教育を行うにふさわしい施設などの教育条件を整えることも大切なことであります。

学園は老朽化した施設や不十分な施設に対処するため、昭和52年に教育研究施設の整備拡充五カ年計画を策定し、大学体育館をはじめ小学校中央館、中学・高等学校体育館、小学校特別教室棟、中等・高等学校特別教室棟および大学図書館別館など各学校の施設建設にとり組んだのであります。また、この事業計画には二十億円の建設資金を必要といたしました。しかしながらこの二十億円のすべてを授業料等の経常収入だけで負担し得ないため、学園の財政事情を考慮して十億円は学内資金を捻出し、残る十億円を募金によることとして父母、卒業生、教職員の方々からの学園内募金五億円、学園外の関係の深い会社などからの募金五億円を予定して、この計画はスタートいたしました。

計画の諸施設は、関係者のご努力によりすべて無事故のうちに順調に進捗しましたが、その途上で、建設費の高騰や建築基準法令の改正などの影響をうけ、また将来のことも考えて学生・生徒・児童にも、教職員にも喜んでもらえる教育効果のあるものを整備したいとの希望に從って原計画を一部拡大したこともあり、当初の予算を約七億円超過し、約二十七億円を要することになりました。

この予算の超過分は、学内資金で充当し、募金については当初の目標額十億円をぜひとも達成できるように各方面にお願いした訳であります。昨今

の厳しい経済情勢下にもかかわらず、幸いにも多くの方々のご理解ご支援を賜わり目標額を達成することができました。本当にありがたいことだと感謝にたえないところであります。

施設の拡充整備に終りはございませんが、この基盤のうえに一層教育の充実に努め、今回の数限りないご芳情ご援助に対し応えてまいる所存であります。

最後にこの事業の完了にあたり、ご協力ご支援を賜りました各位に心から感謝申し上げ、この事業の経過・状況等について報告申し上げる次第でございます。

教育研究施設一覧

大学体育館

総工費 五億九千七百万円

昭和五十四年一月十六日完成

大学図書館別館

総工費 六億二千百万円

昭和五十八年三月三十一日完成

中学・高等学校第二体育館

総工費 三億七千万円

昭和五十六年三月二十三日完成

中学・高等学校特別教室棟

総工費 四億八千三百万円

昭和五十七年八月十九日完成

小学校中央館

総工費 二億八千三百万円

昭和五十五年一月三十一日完成

小学校特別教室棟（松林館）

総工費 三億八千二百万円

昭和五十七年八月十九日完成



完成した大学図書館別館

理事長 古賀繁一

募金の状況

- 申込件数 六、二六一件
- 寄付金額 十億三千三百七拾九万円
- (内訳)
- 在校生父兄 四億六千三百八拾八万円
- 卒業生 三千二百八拾一万円
- 会社等法人 五億一千六百五拾八万円
- 学園教職員 一千五百拾二万円

(自昭和五十二年十月一日～至同五十八年九月三十日)

◇父母懇談会の開催

大学では、創立以来の教育方針である少数教育の実をあげるため、かねてから在学生のご家庭との関係を密にするよう考慮してありましたが、その一つの試みとして、去る九月十一日(日)に、成蹊会中国支部のご協力を得て、中国・四国地方在住の在学生父母と本学関係者との懇談会を、広島で開催しました。

当日は、あいにくの悪天候にもかかわらず、約百名の父母が出席され、全体説明会、学部別説明会、個別懇談会の日程を無事終了することが出来ました。これもひとえに、地元中国支部の皆様のお力添えによるものと感謝しております。

なお、これをかわきりに、この懇談会を毎年の恒例行事として、順次地区ごとに企画・実施して行きたいと考えております。

また、懇談会に続いて成蹊会中国支部会員の方々と合同懇親会を行いました。また、地元の卒業生と在学生父母とがなごやかに歓談する様子は、まさに校歌の一節『字は大なり』さながらで、誠に感慨深いものがありました。

◇大学図書館情報処理システムの稼働開始

去る九月九日、図書館別館オープンと同時に、資料の受入、目録整理、貸出、返却処理から情報検索まで一連の図書館業務をコンピュータで処理する

総合的な管理システムとして、成蹊大学図書館情報処理システム「ILIS」(Integrated Library Information System)がスタートしました。

このシステム開発の狙いは、トータルな機械化処理による業務の合理化、省力化にあります。図書館をとりまく新しい時代の波が開発を促した大きな動機になったと言えます。

大学図書館では、昭和五十四年六月、館内に機械化検討委員会を設置し、種々検討を重ねていたところ、幸いなことに、昭和五十五年十月「大学情報処理センター」が開設され、大型電算機システム(MELCOM COSMO700Ⅲ)が導入されたのを機に、同センターの協力を得て「ILIS」の開発にとりかかりました。

それから三年を経た現在、第一期として開発した運用業務資料の貸出、返却、予約受付、利用状況、書誌の問合わせ処理等が、カウンターの端末機(日本語ワークステーション)を通して行われており、利用者に対するサービス向上に役立っています。

◇成蹊大学公開講座の開設

地域社会との密接な連携をはかり、開かれた大学への期待にそつため、大学は、公開講座を開設することになり、今年度は、「私達の生活を考える」というテーマのもとに、十月十五日から五回シリーズで、毎回土曜日の午後二時から四時まで実施しました。

講師および演題は、篠原三代平経済学部教授の「産業と福祉」、牟田口義郎文学部教授の「日本を正しく理解してもらうために―中東での経験から―」、江守一郎工学部教授の「交通安全のための生活の知恵」、高橋三雄経済学部教授の「コンピュータは生活をどう変えるか」、佐藤三法学部教授の「日本の進路と西欧モデル―くらしと政治をめぐって―」で、武蔵野市をはじめ、近隣市区在住者および学生・教職員約百二十名が聴講されました。

大学としては、今後、この公開講座を一層充実させて行く所存ですので、皆様のご参加をお待ちしております。

◇高等学校の学習旅行

昭和五十五年度から、従来の修学旅行にかわり新しい型の行事として学習旅行が実施されている。これは「学習」という名が冠せられているが、狭い意味の学習に限定せず、明確なテーマ、目的をもち、なんらかの形で日常の学習に結びつけたものであればよいとするものである。高校二年生を対象に参加自由で希望者が自分でコースを選択する。この点で従来の修学旅行とは、かなり性格を異にしている。

その立案や企画は高校一年入学直後から始まり、実施は高校二年の夏休みか、三年生に進級する直前の春休みである。夏か春のどちらか一方に参加できる仕組みである。企画は生徒側に立案させるものと教員側から提示するものがあるが、生徒の自発的な企画を歓迎している。一応、案が出揃ったところで参加希望者を募り、一定の希望者数が充たされたとき、(原則的には十名以上)そのコースは成立したものととして、実施計画が進められる。そこでコース担当の教員と参加希望の生徒たちを中心に協議して細部まで煮つめていく。日数、費用は、三泊四日、五万円から六万円までという枠がある。

本年までに実施されたコースの例として、次のようなものがある。

- 「生物の校外学習(足摺コース・東四国コース)」「歴史探訪(飛鳥コース、金沢コース)」「北陸の宗教と山村の探訪(永平寺、金沢、白川郷コース)」「津軽の文化探訪コース」など。

グループによって多少の相違はあるが参加者は数名から、三、四十名くらいまで、それぞれ密度の高い有益な旅行が実施されている。それは、実施計画を練り上げるに至る過程で、何度もミーティングが繰り返されることと同時に、事前学習が回を重ねて実施されるからである。テーマに関連した読書をしたり、自分でレポートにまとめたり、発表し合ったりする機会が持たれるのである。

こうして教員と生徒、生徒同士が事前学習を通じ、触れ合いも密になり、研究も進んでいく。いよいよ実施となると下準備も十分に整って、その成果が上がるというわけである。旅行から帰ってからは、テーマに従ってレポー

トや感想文を書いて発表したり、まとめて小冊子にする、あるいは文化祭で発表するなど、その成果を公開しているコースもある。

積極的に参加する生徒の自発的な研究や調査、レポートなどはまことに多彩で、相当に研究的なものもある。

学習旅行は春や夏の休暇中に実施されるので、クラブ活動の日程などで参加できないというような問題点はあるものの、学習旅行そのものの本来の目的は可成りの程度に達成されていると思う。現在の参加率は全員の約四割で、(その中では女子がやや多い)もっと多数の参加が望まれるが、今後とも成果を着々と積み重ねることによって参加意識を高めていきたい。

(北川茂治・中・高校教頭)

◇小学校教育研究誌「成蹊教育」の発行状況

成蹊会から贈られた「学術・教育研究基金」をもとに、昭和五十二年から発刊の運びとなりましたこの「成蹊教育」は、校費も加えて年二回発行し、現在第十三号を編集中でございます。部数が限られていますので、多くの方々にお送りできませんが、ご参考までに、これまでの各号の特集テーマを紹介しておきます。

- 1号 「日記指導」
- 2号 「夏の学校」二十四時間教育を考える」
- 3号 「特別学習」個性を伸ばす教育を考える」
- 4号 「教科の指導1」
- 5号 「新しい教育課程と教科の指導2」
- 6号 「子どもの生活を考える1」
- 7号 「子どもの生活を考える2」
- 8号 「子どもの生活を考える3」
- 9号 「成蹊教育と文化祭」
- 10号 「成蹊の子どもと教師」
- 11号 「子どもをとらえる」
- 12号 「成蹊小学校教育の力点」

誌面を貸りまして、成蹊会からのご援助に厚くお礼申し上げます。

◇東京私立初等学校協会陸上記録会

この数年、東京都内の私立小学校間では、教師の研究実践の交流や研修会ばかりでなく、児童による陸上記録会や水泳記録会、体操やマスケームの発表、球技の試合等の親善行事が活発になってきた。これらの会の主催は、東京私立初等学校協会名で行われるが、実際上の運営は、すべて私立小学校の体育部に所属する教師や、開催校関係の教職員の尽力で進められてきた。

本校は、一九七九年から実施された陸上記録会の開催校として、第一回から第五回(本年度)までの運営に携わってきた。都内の私学のなかで、四百mのトラック・フィールドと千名以上を収容できるスタンドを完備した学校は、稀有な存在だからである。

体操やマスケーム、球技等の参加者にはないが、陸上と水泳の記録会では、全参加児童の記録が計時、計測され、それぞれに記録証が渡されている。この記録証には、順位の記録が記入されない。しかも、各種目の上位者を表彰するような規定もない。各校の天狗を一同に揃えて、大会的な雰囲気のないなかで、それぞれの自己記録に挑戦させるという趣旨が、陸上や水泳の他の大会とは、いささか性格を異にする点であろうか。

しかし、いずれにしても、これらの児童間の親善行事は、見る者が見れば各校の水準や実力が一目瞭然とわかるわけであり、教師や参加児童にとつて大きな刺激となっている。

今年度の陸上記録会は、六月五日(日)に開かれた。従来は、十一月に実施してきたが、グラウンドコンディション不良のため、二回も中止した経過から、日程を繰りあげて、六月開催としたのであった。幸い、天候も良く当日は、好コンディションの記録会となった。本校児童の順位と記録は次の通りである。(参加校十三校・一校の出場者一名、合計一競技種目毎に二十六名)

・女子千 m 1位 藤田 香 三分四十二秒(大会新記録)

- ・女子百 m 6位 笹原 智子 三分五十一秒
- ・女子五十 m 2位 小山貴美子 十四秒九五
- ・女子立ち幅とび 4位 小山貴美子 七秒九五
- 5位 川村 桃子 一九一 cm
- 6位 井出 裕子 一八五 cm

- ・男子立ち幅とび 4位 石黒 裕章 一九六 cm
- 6位 井出 裕子 三五五 cm
- ・男子走り幅とび 2位 石黒 裕章 四一三 cm
- ・女子走り高とび 2位 堀野 幸子 一一〇 cm (大会新記録)
- 1位 三神 貴 一二七 cm
- ・男子走り高とび 1位 三神 貴 一二七 cm
- 2位 与儀 圭 一一〇 cm

- ・女子ソフトボール投げ 1位 岩崎 恵子 四〇・六〇 m
- 6位 馬話 玲子 三二・五一 m
- ・男子ソフトボール投げ 1位 岩田 真佳 五四・八五 m
- 2位 岡 正典 五四・七三 m

- ・女子四百 m リレー 4位 堀・川村・堀野・小山 一分二秒二六
- 本校児童の記録をみると、跳躍や投では活躍していても、短距離走やリレーで、もう一步という実態が露呈している。

この記録会は、他校選手との競技のなから、全校児童への指導の手だてを探る側面ももっている。全校児童の走力や諸々の運動能力が向上することを願って、条件整備と指導内容の細目化を目指しているこの頃である。

(高柴光男・小学校教諭)

◇成蹊中学・高校における留学生交換制度

戦後長らくは、留学といえは日本から海外への留学のことであり、外国から日本の学校に留学生を迎えることは、ごく根られた規模でしか行われていなかったと思います。しかし、日本の国力が回復し、海外での日本に対する関心が高まるにつれ、外国から日本に留学を希望する者の数が増え、現在では高校レベルでも留学生を受け入れている学校がかなり多くなっているよう

です。ここでは、成蹊中学・高校が独自に行っている二つの交換留学制度について御紹介したいと思います。

その一つは、アメリカ合衆国ニュー・ハンプシャー州コンコードのセントポール校との間に行われている留学生の交換です。セントポール校は、ハーバード、イエール、プリンストン等、米国の一流の大学へ生徒を多数送っている、いわゆるプレップ・スクール(大学進学者のための私立中学・高校)中の名門校で、成蹊からは昭和二十四年に榎原君が留学したのが同校との友好関係の始まりです。その後三十余年間、学校間の取り決めとして、成蹊からは継続して留学生を送ってきましたが、同校から成蹊に学んだのは、昭和四十九年の春、二カ月間の体験入学をしたS・ヴァスコフ君(ペンシルバニア大に進学)が初めてです。これは正式の制度によるものではなく、個人的希望を容れて成蹊に迎えたものですが、その後同じような形でL・マッカルビン君(プリンストン大に進学)、J・メイバンク君(ハーバード大に進学)が成蹊で短期間学んでいます。

昭和五十四年、成蹊・セントポールの友好関係三十年を記念して、パンフレットの作成、圖書の寄贈等が、卒業生その他関係者の手で行われました。これはセントポール校でも大きな反響を呼び、同校では翌春「日本週間」を企画、これに当時の奥任校長が招かれて出席、同校のオーツ校長(現ハーバード大学理事)と両校間の関係強化について話し合われました。その結果、オーツ校長はセントポール校において先ず日本語を正課として採り入れ、その随習者の中から選んで、一年間成蹊に留学生として送り出すという案を示されたのです。そして、これによって昭和五十六年九月、E・ベンテル嬢(ハーバード大に進学)とC・マッキー君(ブラウン大に進学)の二名の生徒が、新しい制度による第一回留学生として到着、現在は四人目のJ・ユロー君が成蹊に在学中です。

成蹊中学・高校によるもう一つの交換留学制度は、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州カウラのカウラ高校との間に行われています。カウラは人口七千人程の農業都市ですが、ここは第二次大戦中の日本軍戦死者墓地のある所として知られています。同市の市長A・オリバー氏が昭和四

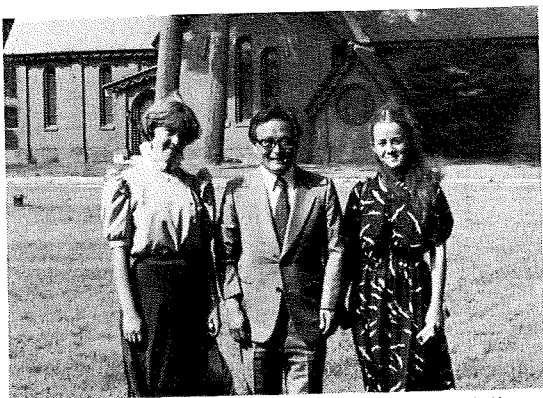
十四年に日本を訪ねられた際、成蹊に來校され、当時の票原校長と話し合われてこの交換留学制度が始まりました。そして、毎年一名の生徒が相互に相手校に一年間ずつ学ぶこととなり、現在成蹊では十三人目の留学生D・ワットソン嬢が学んでいます。

以上がこの二つの留学制度が誕生した経緯ですが、これが今後順調に発展して行くためには、解決しなければならない幾つかの問題があります。その第一は留学生のための宿舎の問題です。セントポールのような寄宿舎もなく、カウラのように地域ぐるみの事業ともならない成蹊では、留学生の受け入れは専ら在校生の家庭の御好意に依存しているのが現状です。しかし、受け入れを申し出られる家庭の数は限られており、また、それから恒常的な受け入れ組織を作り出す

事は困難です。またカリキュラムの面でも、必修科目の多い成蹊では、留学生に適したプログラムを設定するのは容易ではありません。その他大小さまざまな問題があります。折角こうして発足した留学生の相互交換制度です。何とか今後とも維持・発展させて行くため、広く御助言、御助力を頂ければと考えております。

(中島 知・中学・高校総務主任)

(成蹊学園総務課提供)



セントポール校々庭にて(中央は筆者、左は第2回留学生 T・マクゴワン嬢)

成蹊会報

昭和58年5月1日
昭和58年10月31日

一、会 議

○理 事 会

第87回理事会 (5月24日)

(1) 昭和57年度事業報告及び収支決算並びに剰余金処分案承認の件

(2) 財産目録 (昭和58年3月31日現在) 承認の件

(3) 成蹊会特別会員(教職員) 推薦の件

(4) 成蹊学園維持会委員(卒業生関係) 推薦の件

第88回理事会 (7月25日)

(1) 会長・副会長・常務理事互選の件

(2) 特別委員会委員選任の件

(3) 第25回謝恩顕彰会開催の件

○特別委員会

○財務委員会

(1) 成蹊クラブ委員会 (5月10日)

(5) 学術・教育研究委員会 (5月16日)

○広報委員会

(3) 育英奨学委員会 (5月13日)

(7) 学術・教育研究委員会 (6月27日)

○同 窓 会

池袋幹事会

法学部委員会

法学部委員会

高校(旧制)同窓会幹事会

法学部委員会

支 部 会

千葉支部会 (7月9日・千葉市)

○評議員会

中国支部会 (9月11日・広島市)

○会 員 総 会

第28回通常会員総会 (6月24日)

(1) 昭和57年度事業報告及び収支決算並びに剰余金処分案承認の件

(2) 財産目録 (昭和58年3月31日現在) 承認の件

(3) 昭和58年度事業計画及び収支予算案承認の件

(4) 評議員選任の件

二、人 事 (7月25日・第88回理事会)

会 長 丹治 道生 (旧高4)

副会 長 進藤 次郎 (中学7)

石坂 泰彦 (政経1)

常務理事 谷岡喜久蔵 (旧高1)

生野 専吉 (旧高6)

梶谷 玄 (高4)

三、催 物

○第25回謝恩顕彰会 (10月6日・成蹊クラブ) △18頁参照

○第23回日本寮歌祭 (10月8日・日比谷公会堂)

四、事 業

○成蹊会誌第57号発行 (6月1日)

○学術・教育研究助成金

小学校教育助成金 (7月7日) 九十万円

学術・教育研究助成金 (7月7日) 七十万円

○国際交流助成金 (7月7日) 二十万円

○後援金 (十万元以上記載)

成蹊桜祭 二十万円 (4月5日)

高校蹊祭 十万円 (10月28日)

大学櫛祭 十万円 (10月28日)

大学体育会 十万円 (10月31日)

日本寮歌祭 十万円 (10月31日)

昭和58年12月1日

編集兼発行人 谷岡喜久蔵
発行所 社団法人成蹊会

〒180 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

電話 0422・51・2244